

Title	みじかかった浪速の夢
Author(s)	天谷, 喜一
Citation	大阪大学低温センターだより. 2002, 118, p. 1-1
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/11696">https://hdl.handle.net/11094/11696</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# みじかかった 浪連の夢

天谷 喜一

手元に低温センターだより第1号(1973年1月)がある。編集委員に私の名がみえるが、名ばかりで、発刊に際して表紙のデザインを決める会議に一度出たきりであった。従って、ほどなく委員のリストからははずされ、以後、研究に専念出来ることとなった。その後、センターだよりは歴代の熱心な編集委員により、委員長の「阪大オリジナル」を合言葉に健全な発展を遂げ、50号「The 夢」、100号「希望」の記念号を経て今日の116号(2001年10月号)に至っている。あれからもう30年近くもたったのかと改めておどろいている。

もう一冊、低温センター20周年記念誌「低温の歩跡」がある。その中には、今日の低温センターに至る過去の先達の尽力が記されていて、大量の液体ヘリウムを当然のこのように使用して来た私は改めて頭の下がる思いにおそわれるのである。「血の一滴」の意味のわからない若い人達にも是非一度読んでほしいと思う。

さて、かくいう私は、研究面でせめて「オリジナル」を心がけることでセンターよりうけた恩恵に報いたいと願ってきた。そうはいうものの、私は元来勉強が(この言葉からして)きらいで、なまけものであったから、あらかじめ出来るだけ人のやってそうにないテーマにしぼることで競合と摩擦を避け、省エネ化を計り、その分独り夢をひろげる道を選んだ。その際、人はどうあれ自分にとっては面白いと思えることが大事で、むしろその事が何にもまして優先した。当然、「面白い」にもグレードがあって何を面白いと思うかが問題ではあるが、結果的に、私は研究を楽しんだ。しかし、オリジナルな成果の程は心もとない。

今までは研究のスタイルも対象も人それぞれであって良いと思ってきた。しかし、避けがたく評価はついてまわるものである。最近、大学でもいささかその度が過ぎて、私のように面白がっているだけの人種には住みづらくなって来たと感じている。何とか今迄やって来たとしたら、時代と私をとりまく研究環境に恵まれたというに尽きる。

このような次第であるから、今後、若い研究者はどうすればよいかについての贈る言葉はない。くり返すがオリジナルな研究について、私自身は常にそのことが頭の片隅にあって、まずは夢を見、それらの中で現実に移せるものについてはそれなりに努力をして来たつもりである。唯、その多くは失敗に終り、時には院生が泣きをみた。時にうまくいったと思えるケースも振り返れば真のオリジナルに尚距離があった。オリジナルは引き合わない。それを覚悟で、やっぱりビックリする様な仕事をやってほしいと願う。

センターだよりは毎年4号のペースで発行されるのであと8年あまりで150号記念となる。

その時、我々は尚「夢」多く「希望」に満ちているであろうか。答えをその中に見出すことができるかどうかは、無責任だが後に続く人達にかかっている。